

日露交歓交響管弦楽演奏会

——山田耕筰の交響楽運動とロシア音楽界の繋がりを探る——

野原泰子

序

山田耕筰¹⁾ (1886～1965) が主導した日露交歓交響管弦楽演奏会 (1925年4～5月) は、ロシアでの演奏経験をもつ音楽家 (ロシア人を中心に、主に旧ソビエト連邦の構成国の出身者) をハルビンやソビエト連邦から招き、山田が率いる日本交響楽協会の音楽家と混成オーケストラを形成し、東京を皮切りに約1ヶ月に亘り巡演した一連の演奏会である。日本での本格的な交響楽運動の嚆矢として、これまでも様々な文脈 (日本の洋楽史、山田や近衛秀麿の伝記、ハルビン音楽界との関連) で着目されてきた。先行研究では一次資料 (山田の書簡やノート)、演奏会の配布資料、新聞雑誌の記事が調査されているが、日本語の資料には来日演奏家に関する情報が乏しく、当時の記事には不正確な記述も多い。来日演奏家の入国に際する公的資料は現存せず²⁾、彼らの大部分の姓すら、演奏会の配布資料などのカタカナ表記で知られるだけである。一方、当時のハルビンの露語新聞『暮らしのニュース Новости жизни』 (НЖと略記)³⁾、およびロシア革命 (1917年) の後にハルビンへ移住したロシア人音楽家に関する研究 (露語文献) には、この演奏会に関わる重要な情報がある。本論では日本側とハルビンやロシア・ソ連側の資料の双方を用い、来日演奏家に関する情報を始め、この演奏会に関連する新たな情報を提示し、また当時の山田とロシア・ソ連の音楽界との繋がりを、具体的かつ多面的に明らかにする。

第1章では、演奏会の計画と開催までの経緯を辿る (1-1, 2)。第2章ではハルビン音楽界、山田らの同地滞在に着目する (2-1, 2, 3)。第3章では演奏会のスケジュールや曲目、出演者に関する情報を提示する (3-1, 2, 3)。第4章では演奏会以前に来日したロシア人声楽家と山田の交流に着目し、それが音楽家招聘の実現に繋がった事実を明示する (4-1, 2)。

1) 1930年12月に「耕作」から「耕筰」に綴りが改変されたが、本論では後者の表記で統一する (引用、表、書誌情報を除く)。また演奏会当時の資料からの引用文、人名等に関しては、漢字は新字体に改め、仮名は旧仮名遣いを用いる。ロシアの人名に関しては、力点が分かるものは音引きで表記する。

2) 外交史料館 (外務省の公文書館) に問い合わせたが、この演奏会に関連する資料は残されていない。

3) 当時のハルビンの主要な露語新聞 (日刊) 『新生活 Новая жизнь』 (1907～1914) の後継紙で、1914年8月2日から1929年6月18日まで刊行された (Shaohua 2001, 411 & 421)。

1. 演奏会の企画から開催までの経緯

1-1. 当初の計画と震災による頓挫

山田が自ら振り返るように、第一次世界大戦後に海外の優れた音楽家⁴⁾が次々と来日公演を行い、レコードに培われた音楽愛好家の間ではオーケストラを求める声が高まった。しかし陸海軍の軍楽隊、東京音楽学校の演奏会の他には、幾つかの管弦楽団が現れては経営難から忽ち消え、山田にもフィルハーモニー管弦楽部⁵⁾での「苦い失敗の経験」があった(山田 1926, 817-819)。

演奏活動自体を目的とする音楽家団体を組織すべく、山田は1923年に「日本交響楽協会の実現」を企てる。「ロシアから三十余名の優秀な楽手を招聘し、これに若干の邦人を加へ、連続的に定期の演奏を、全国の各重要都市において開催する一方、邦人楽手の養成を計り、将来は邦人のみよりなる大交響楽団を組織する」計画だった⁶⁾。山田は同年夏、革命後に祖国から移住した多くのロシア人音楽家が活動するハルビンへ赴き、「東支鉄道所属の管弦楽団」⁷⁾と音楽家招聘の契約を交わそうとしたとき、関東大震災(9月1日)の報を受け、計画は頓挫する(山田 1926, 819-20; 山田 読売 1925/4/23「日露交歓交響楽祭に際して」)。

1-2. 歌舞伎座の再開と日ソ基本条約の締結

震災後の復興に伴って首都の楽壇が活気を帯びるのを目の当たりにし、山田は「日本交響楽協会」を組織・始動する。筆者が確認できた最初の演奏会は、海軍軍楽隊と出演した「芝区青年団会館建設音楽大演奏会」(1924年4月18日:日比谷公園音楽堂)である⁸⁾。その後「日本交響楽演奏」(4月20日:大阪中之島中央公会堂)⁹⁾を皮切りに、神戸(4/21)、姫路(4/22)、京都(4/25)、東京(4/27)を巡演し、京都公演プログラムに出演者中49名の氏名がある¹⁰⁾。この頃、山田は自宅に日本交響楽協会の事務所を開いた(日本近代音楽館 1996, 10)。

1925年1月、銀座の歌舞伎座が再建を経て開場し、劇場を運営する松竹合名社の社長・大谷竹

4) 1921年のミーシャ・エルマン(ミハイール・エーリマン)(Vn.)、エルネステイーネ・シューマン=ハインク(Vo.)、1922年のエフレーム・ジンバリスト(ツインバリスト)(Vn.)、レオポルド・ゴドフスキー(Pf.)、1923年のフリッツ・クライスラー(Vn.)他の来日が挙げられている(山田 1926, 809-811)。

5) 岩崎小彌太が組織し、山田の指揮で1915年5月から定期演奏会を行うが、1年足らずで瓦解(後藤 2014, 213-223)。

6) 後藤によれば、ハルビン在住の中根弘(音楽評論家)が山田に手紙で、同地のロシア人音楽家を招き日露合同の管弦楽演奏会を開催する提案をした。両者は1923年初夏に話し合い、8月にハルビンで交響楽団と交渉した(後藤 2014, 288)。手紙の日付や所在は不明。日本楽劇協会編『この道』によれば、1922年に原善一郎が山田を訪ね、ハルビンの交響楽団を指揮する話を持ち掛け、翌年8月に山田がハルビン行を実行した(日本楽劇協会 1982, 156-157)。

7) ハルビンの中東鉄道交響楽団のこと(2-1を参照)。

8) 青年会館の建築費を集める目的の演奏会(読売 1924/4/18「日比谷奏楽」)。プログラムは日本近代音楽館所蔵。軍楽隊(指揮:田中豊明)の曲目に《シェエラザード》第1、2楽章があり、この曲が日露交歓交響管弦楽演奏会に先立ち部分的に演奏されていたのが分かる。

9) 「日本交響楽大演奏会 名実ともに日本を代表する山田耕作氏の大管弦楽団」(大毎 1924/4/13)は、「日本交響楽協会」が誕生し、最初の大阪での演奏会で、山田の指揮のもと約60名の団員が出演すると報じた。

10) 一連の公演のプログラムは日本近代音楽館所蔵。後藤によれば、山田が記した日本交響楽協会の「演奏旅行日誌」(1924年5月)に奏者56名の姓名の記載がある(後藤 2014, 286-287)。日誌の所在は不明。

次郎に、山田は日露交歓交響管弦楽演奏会の開催を提案する。山田によると大谷は「かゝる大規模の事業を経済問題を度外視して快く引受け」¹¹⁾、松竹合名社と日本交響楽協会の提携が成立、同社の文芸顧問・松居松翁（1870～1933）が企画の協力者となる。

折しも 1925 年 1 月 20 日に日ソ基本条約が調印され、ロシア革命後に途絶えていたソ連との国交の回復が決定する（批准は 2 月 25 日）¹²⁾。山田は「新条約で楽壇にも春は近づく——待たるゝロシアの新人達」（東朝 1925/1/25）の中で、「日露の条約が成立して我が洋楽界にも大きな喜びが期待される」と述べている。条約締結の立役者である後藤新平に、山田は演奏会の企図を伝えて協力を求め、来日音楽家の入国許可に関して便宜を得ている¹³⁾。

かくして歌舞伎座の再開を祝する催しに、「日露修交記念事業」（読売 1925/4/10「日露交歓音楽会」）という大義が加わる。以下は、大谷が演奏会に寄せた文章の一部である。「この新たなる器に盛るに新たなる内容を以てすべく、同時に又芸術の国際化の希望を実現すべく、偶々日露両国の国交復旧を期とし、全露芸術家組合¹⁴⁾の推薦にかゝる彼の国第一流の音楽家諸氏を聘して、日露交歓交響管弦楽大演奏会を開催する運びとなりました [中略] 日露両国は国土相隣接し、彼我両国の親善は世界平和の重要なる楔であります。[中略] 我々の企画は単に芸術運動の国際化たるに止まらず、国際的情緒の融和の上に最も美しくして最も効果あり、最も高尚にして最も意義のある音楽芸術を通じての国際運動であると信じます」（大谷 1925, 1）。

2. ハルビンの音楽界

2-1. ハルビンの交響楽団

演奏会に出演した来日音楽家の多くは、ハルビンで中東鉄道¹⁵⁾が運営する交響楽団（以下「中東鉄道交響楽団」と呼ぶ）に所属していた。その歴史的な経緯に触れておこう。

1896 年に露清銀行と清朝の間で中東鉄道の敷設と操業に関する契約が結ばれ、ロシアで中東鉄道株式会社が創業する。1904 年に全線が開通した鉄道沿線で、ハルビンや大連といった大都市が勃興する。その領域は清朝や中華民国の領土内にありながら、中東鉄道がこれらの都市の行政を担い、ロシアによる治外法権が施行された（麻田 2012, 2）。

ハルビン音楽界では、1911 年に中東鉄道倶楽部の会館 Железнодорожное собрание（Желсоб）（以

11) 山田耕作「音楽の最高価値は交響乐的管弦楽——日露交歓演奏に際して」（神戸 1925/5/11）

12) 国立公文書館が資料を公開（http://www.archives.go.jp/ayumi/kobetsu/t14_1925_01.html 2021 年 12 月 10 日閲覧）。

13) 山田によれば、ソ連の音楽家の入国許可を内務省から得るのが非常に困難で、後藤が警保局長や内務省との間をとりもった（発表時不詳の放送原稿 山田 2001, 2: 636-637）。

14) 後述のラピスのこと。「2-2. ラピス・ハルビン支部とグリツァーイの協力」を参照。

15) 中東鉄道 Китайско-восточная железная дорога（КВЖД）は歴史の変遷に伴い東清鉄道、東支鉄道、北滿鉄道と様々に訳されたが（演奏会当時は「東支鉄道」の訳語が使われている）、ここでは中東鉄道の訳語を使う。満州里から黒龍江省の綏芬河を横断したシベリア鉄道の短絡線。ハルビンから旅順に至る路線は、日露戦争後に長春以南が日本に譲渡され、日本の南滿州鉄道株式会社の所有となる（麻田 2012, 2）。

下「鉄道会館」が建築され、ハルビンの中心的な演奏会場となる。ここを拠点に、1919年に中東鉄道交響楽団が組織される。指揮者メッテル¹⁶⁾が長らく楽団を率い、1923年からスルーツキイ¹⁷⁾も指揮台に立った。ロシア革命後の混乱を逃れ、ロシアからハルビンへ移り住んだ優れた音楽家に加わりながら、高水準の楽団へ成長し、この楽団を中心にオペラやオペレッタ、室内楽など多彩な演奏活動が展開された(Цзо 2014, 21 & 60-64)。

近衛秀麿(1898～1973)は、山田と共に日露交歓交響管弦楽演奏会の指揮者を務めた当時、次のように述べている。「ハルビンは交響楽団の所在地として日本に一番手近い。其質に於ても亦上海等の比でない。例のヘルツが率ゐるサンフランシスコの夫れでも日本を訪れない限り我々はハルビンを措いて他の地にシムフォニーを求める事は難しい関係にある」(近衛 1925, 11)。

2-2. ラビス・ハルビン支部とグリツァーイの協力

1925年2月、山田の秘書・原善一郎¹⁸⁾がハルビンに先発し、音楽家招聘の仮契約を周到に準備した上で、4月に山田と松居が同地へ赴き契約を結んだ¹⁹⁾。松居のハルビン滞在記によれば、同地で彼らを出迎えた「三人の露国人」は、山田の親友である声楽家「アレキサンドロフ・チキン」²⁰⁾、「スルツキイ」(「東支鉄道クラブの今年のオーケストラの楽長」)²¹⁾、「グリサイ氏」(「労働芸術組合の絶東の支部長」)²²⁾だった(松居 1925b, 36-37)。

ラビス РАБИС とは「芸術労働者 РАБотники ИСкусств」の略語で、ソ連の「芸術労働者組合 профессиональный союз работников искусств」である。ハルビンにもラビスの「支部 Губрабис」があり、その当時の代表がマクシム・グリツァーイ Максим Грицай であった²³⁾。ラビスの支部間に連絡網があり、音楽活動が盛んなハルビンには、ソ連本土からラビスを介して音楽家や演奏団体が公演に訪れた(Крыловская 2016, 73)²⁴⁾。

16) エマヌイール・メッテル Эммануил Меттер (1878～1941) ウクライナ出身、ベテルブルグ音楽院を卒業後、ベテルブルグ、バクー、チフリス、ハリコフ、カザンで指揮活動し、1918年にハルビンへ移る(Цзо 2014, 61)。1926年に日本へ移住した後、京都大学交響楽団、大阪放送管弦楽団等を指揮した。

17) アレクサンдр・スルーツキイ Александр Слуцкий (1887～1954) ベテルブルグ音楽院を卒業後、ベテルブルグの音楽劇場で働く。20年代にハルビンで活動した後、上海でオペラや交響楽団の指揮者として活躍(Цзо 2014, 64)。

18) 原善一郎(1900～1951)は1918年から商社のハルビン支店に勤務しながらロシア語を学び、その卓越した語学力を活かして商取引に携わった(井口 2019, 200-201)。1923年末、山田が原を秘書に雇った(後藤 2014, 288)。

19) 契約は全20ヶ条で、演奏は「必ず正しき調律、正しき楽器をもつてせねばならぬ」、「演奏若くは練習の際、私語を交へ、又は喧噪に亘りすべて芸術家の体面にかゝる所為ある者は俸給の三倍の罰金に処す」等の条文があり、「露国の芸術組合の現行の契約を基礎としたもの」(松居 1925b, 37-38)。

20) 「4-1. 山田耕作の歌劇運動とバリトン歌手アレクサンдрロフ」を参照。

21) 松居によれば、スルーツキイは寡黙で親切な紳士。革命の際に所有楽譜の大半を焼き捨てられたが、山田の話では彼ほど珍稀な楽譜の所有者は世界でも稀有だという(松居 1925b, 36-37)。

22) 松居によれば、グリツァーイは大きな体格の中年の紳士で、上着のボタン穴に赤色政府のバッジがついていた。革命に尽力し、中央執行委員の一人であり、かつては俳優としてチェーホフの作品で主人公を演じた(松居 1925b, 37)。

23) ラビスのハルビン支部は、創造的人材の登録、会費の徴収、職業支援を行った(Крыловская 2016, 73)。

24) こうした演奏会の情報は『暮らしのニュース』で伝えられ、例えば「マールイ劇場のハルビン巡演に寄せて」(НЖ 1925/3/21)からは、モスクワのマールイ劇場のハルビン公演の計画が、ラビスを通じて決定したことが分かる。

【資料 1】「日本におけるロシア交響楽」『暮らしのニュース』1925年3月21日

(НЖ 1925/3/21; Ли Яньлин 2010, 210)

原文 (ロシア語)	日本語訳 (野原訳)
<p>РУССКАЯ СИМФОНИЯ В ЯПОНИИ</p> <p>В Харбине сформирован, при участии местного губотдела «Рабиса» и специально уполномоченных г. Харасан и гр. Александрова, симфонический оркестр для гастролей в Японии.</p> <p>Оркестр сформирован из харбинских музыкантов во главе с квартетом – гр. Шиферблат, Кениг, Трахтенберг и Приходько и музыкантов, приезжающих из Ленинграда, Москвы и Киева.</p> <p>В Японии русский оркестр объединится с оркестром японского филармонического общества и будет выступать всего в составе 80 музыкантов.</p> <p>Первым дирижером оркестра будет директор филармонического общества, известный японский композитор, г. Ямада.</p> <p>Вторым дирижером приглашен г. Коное.</p> <p>Оркестр выезжает из Харбина 12-го апреля.</p> <p>Первый концерт состоится 26 апреля в Токио в самом большом театре Кабукиза, вмещающем 3,000 зрителей.</p> <p>На этот концерт, который посвящается японо-советскому соглашению, будут приглашены члены японского правительства и сотрудники посольства СССР, если к этому времени они успеют прибыть в Токио.</p> <p>В дальнейшем симфонический оркестр будет гастролировать по всем крупным городам Японии.</p> <p>Гастроли русского симфонического концерта будут всего продолжаться 1 месяц и 10 дней.</p>	<p>日本におけるロシア交響楽</p> <p>「ラビス」ハルビン支部、そして特別に委任された原サンとアレクサンドロフ氏の協力のもと、日本での巡演のための交響楽団が、ハルビンで形成される。</p> <p>オーケストラは、四重奏団——シフェルブラート氏、ケーニヒ氏、トラフテンベールグ氏、そしてプリホーチコ氏をトップとするハルビンの音楽家たちと、レニングラード、モスクワ、そしてキエフから来る音楽家たちから成る。</p> <p>日本でロシアのオーケストラは、日本交響楽協会のオーケストラと統合し、総勢 80 名の音楽家たちで出演する予定。</p> <p>オーケストラの首席指揮者は、交響楽協会の会長で、著名な日本人作曲家である山田氏になる。次席指揮者には、近衛氏が招かれる。</p> <p>オーケストラはハルビンを 4 月 12 日に発つ。最初の演奏会は 4 月 26 日、東京で最大の 3000 人を収容する劇場、歌舞伎座で行われる。</p> <p>日ソの協定に捧げられる当演奏会には、日本政府のメンバーや、もし演奏会までに東京に到着できれば、ソ連大使館の館員が招かれるだろう。</p> <p>それから交響楽団は日本の全ての大都市を巡演することになる。</p> <p>ロシアの交響楽演奏会の巡演は、全行程で 1 ヶ月と 10 日間の予定。</p>

山田らの訪問に先立ち、『暮らしのニュース』の記事「日本におけるロシア交響楽」は、演奏会の計画の大枠やラビスの中心的な役割などを伝えている【資料 1】。松居はグリツァーイを「露国楽人と手を握らせてくれた恩人」と呼ぶ。グリツァーイがハルビンの音楽家から優秀な 25 名を選び、また「クレムリンの中央執行委員」に絶えず電報を送り、モスクワやレニングラード²⁵⁾から一流の音楽家 10 名を招聘できた。契約を交わしたラビスの一室はグリツァーイの住居にあり²⁶⁾、彼は中東鉄道の長官に一行の無賃での送迎も促した(松居 1925a, 4-5; 1925b, 40-41)。山田の記事「音楽の最高価値は交響乐的管弦楽——日露交歓演奏に際して」(神戸 1925/5/11)にも、次のようにある。「名手三十五名を、短期間に招聘することが出来たのは〔中略〕彼地の芸術界に於ける最高権威者

25) ベテルブルグ (正式名称 サンクトベテルブルグ) のソ連時代の旧称 (1924~1991)。

26) 「防寒の二重扉の如きも至って粗末な、二階屋の簡素な数室がグリサイの住居で、かつラビスの事務所である。事務室にはレーニンの大きな写真が貼られ、二人の事務員が忙しくタイプライターを打っている」(松居 1925b: 40)。

たる文相ルナチャールスキー氏及び全露芸術家連盟（ラビス）の非常なる尽力が与つて力あることをこゝに明記する」。

2-3. 山田と松居のハルビン滞在

松居によれば、彼らはハルビン到着後、同地に滞在中の後藤新平を訪ねた²⁷⁾。商業会議所のホール²⁸⁾での弦楽四重奏の演奏会には、招聘する音楽家の中心的なメンバーが出演していた。「シエフアブラード教授、ケーニヒ教授、トラハテンブルク君、ポリホーチコ君の演奏は、全くわれらを驚かした。此四人が一団の中に加はつてくれるといふだけで、此今度の企ての成功を確信される様に見える」（松居 1925b, 39）。彼らは中東鉄道交響楽団の団員で、シフェルブラート²⁹⁾はコンサートマスター、トラフテンバールグ³⁰⁾とケーニヒ³¹⁾も主要な奏者で、もう一人はプリホーチコ³²⁾である。シフェルブラートが率いる四重奏団は、室内楽の分野でハルビン音楽界を牽引し、来日直前にも連続演奏会が行われている³³⁾。

松居によれば、4月10日にモスクワやレニングラードから招いた「老若10人の芸術家」を出迎えた後、「東支クラブの大広間」でティーパーティーがあった（松居 1925b, 41-42）。ハルビンの新聞記事「交響楽団の旅行に寄せて」（НЖ 1925/4/11）は、10日に鉄道会館での顔合わせのティーパーティーで山田がドイツ語でスピーチしたこと、11日に一行がハルビンを発つこと、また興味深いことに山田がラビス・ハルビン支部の会員になったことを伝えている。翌日の写真記事「日本の劇場東京“歌舞伎座”」（図版1）³⁴⁾では歌舞伎座と山田が紹介され、見出しの下には「この劇場で“全ソ芸術労働者組合”ハルビン支部により組織された露日交響楽団が演奏する予定」とある。これは山田のスクラップ・ブック³⁵⁾にも貼られている。一方『読売新聞』は松居の帰京を報じる記事³⁶⁾で、

27) 後藤は4月4日にハルビン着、同地訪問の使命は「東支鉄道と満鉄の和解及び日露両国民の感情の融和」であった（大毎 1925/4/2 「後藤子入露の噂」）。

28) 商業会館 Коммерческое собрание (Комсоб) のホールは、鉄道会館と並ぶハルビンの中心的な演奏会場だった。

29) ニコライ・シフェルブラート Николай Шиферблат (1887~1936) 多磨霊園にある墓碑の情報では、ヴィルナ（現リトアニア共和国のヴィリニウス）生まれ。チフリ音楽学校、ベテルブルグ音楽院卒業後、ベテルブルグの交響楽団のソリストを務め、1920年にハルビンに移る（Цзо 2014, 62-63）。

30) ヴラディーミル・トラフテンバールグ Владимир Трахтенберг (1884~1963) キエフ生まれ。ベテルブルグ音楽院卒業後、チタで教育活動に従事、1922年にハルビンへ移住。シフェルブラートの後任で、中東鉄道交響楽団のコンサートマスターとなる。同地のヴァイオリン界を牽引し、1960年代にオーストラリアへ移住（Цзо 2014, 252-258）。

31) ヨーゼフ・ケーニヒ Joseph König / Йозеф Кёниг (1874~1932) ブラハ生まれ、チェコ人。プラハ音楽院で学んだ後、アムステルダム、ヘルシンキ、ベテルブルグで活動し、ロシア革命後にハルビンへ移住（Цзо 2014, 63）。

32) ヴァシーリー・プリホーチコ Василий Приходько と考えられる。交響楽団のメンバー表には“В. Приходько”とある（表4）参照。後の新交響楽団の定期公演（1934年2月15日：シフェルブラート指揮）でチャイコフスキー《ロココの主題による変奏曲》の独奏ヴィオラ奏者が“Vassily Prihodiko”であり（NHK 交響楽団 1977, 演奏記録 16）、同一人物の可能性が高いと判断した。

33) 演奏会（3/16, 3/24, 3/30, 4/6）の開催が、新聞で予告されている（НЖ 1925/3/14, 3/15, 3/24, 3/29, 4/5）。

34) 『暮らしのニュース』紙面の画像は『中国におけるロシア人移民の文化遺産』（Ли Яньлин 2010）より転載。

35) 山田が新聞雑誌記事の切り抜き、演奏会のプログラムなどを貼り付けて作成したもの（日本近代音楽館所蔵）。

36) 「ロシアの楽人と四日も食はずの旅——耕作氏と共にラビスの名誉会員となり…松翁氏、帰る」（読売 1925/4/18）

【図版1】「日本の劇場 東京“歌舞伎座”」（НЖ 1925/4/12; Ли Яньлин 2010, 273）



松居と山田が「全露芸術家組合（ラビス）の名誉会員」に推されたと伝えており、ハルビンでラビスと日本の芸術界がパイプで結ばれたことが分かる。

一行は大連に着くと、4月13日に大連市主催「後藤子爵歓迎会」³⁷⁾で初の演奏を試み、山田が自作《明治頌歌》を指揮した（松居 1925b, 42; 満日 1924/4/14³⁸⁾）。翌14日には山田の指揮で「日露交歓交響管弦楽演奏会」と銘打つ最初の演奏会を大連市立高等女学校の講堂で行い、その成功は新聞記事「満場の聴衆ただ酔ひて 天国の出現を見るが如し」（満日 1925/4/15）で写真入りで報じられた³⁹⁾。山田は大連で自作《指鬘外道》を指揮したとき、初めて「私の作の美しさを発見した」と述べている（読売 1925/4/23 「日露交歓交響楽祭に際して」）。一行を乗せた汽船は、15日に大連を出港した。

3. 日露交歓交響管弦楽演奏会

3-1. 日本での歓待と巡演のスケジュール

一行は4月18日に神戸入港、20日に列車で東京駅に到着すると、大谷社長や近衛、松竹キネマや歌舞伎座の俳優など大勢の人に迎えられた⁴⁰⁾。彼らは早速、近衛や日本側のメンバーと合流する。山田によれば「日本側の楽人三十六名は日本交響楽協会の楽員」⁴¹⁾で、初めは「合奏に熟練しない邦人楽手」の参加を案じたが、「露人楽手の邦人に対する熱心な指導」と「一週日の猛烈な練習」の末、杞憂は一掃されたという（山田 1926, 821）。23日に公開練習（築地 同志会館）が行われ、その様

37) 「大連での後藤新平子爵」（НЖ 1925/4/15）によれば、後藤は4月10日に大連着、14日に日本へ発った。

38) 記事名「山田耕作氏引率の露国管弦楽団 一行三十八名着連す」

39) 曲目はベートーヴェンの交響曲第7番、山田耕作の《明治頌歌》と管弦楽小品（《太湖船》《夜》《野人創造》）、ヴァーグナー《さまよえるオランダ人》より序曲（満日 1925/4/11, 4/14）。《太湖船》は中国江南音楽の編曲（遠山音楽財団付属図書館 1984, 525）。《夜》は劇音楽《指鬘外道》より〈夜の歌〉のこと。

40) 「日本でのロシアの音楽家たち」（НЖ 1925/4/28）は一行が東京で歓待を受け、非常な注目を集めていると報じた。

41) 「日露交歓交響楽祭」（京日 1925/5/9）

子を各紙が報じた。24日に東京放送局⁴²⁾から来日メンバーの四重奏団（シフェルブラート、トランプテンバールグ、ケーニヒ、プリホーチコ）とベッケル⁴³⁾のチェロ独奏（伴奏：近衛秀麿）が放送され⁴⁴⁾、同時に催された「ラヂオの夕」⁴⁵⁾（日比谷公園音楽堂）では、舞台上の受信機から流れる調べに多くの人々が耳を傾けた。

4月26日、歌舞伎座での4日間の公演の初日を迎える。松居は公演の盛況ぶりを、次のように伝える。「彼等の芸術は最初の一二日こそ、十分に理解されなかつたので、聴衆の殺到を見るを得なかつたが、歌舞伎座の最後の日の如きは山階宮大妃殿下を初めとして、八皇族殿下の御台臨を忝うし、数百人の聴衆を空しく帰らしむる程の盛況を呈した。関西の三都、京、阪、神のいづれに於ても、東京に劣らぬ民衆の歓迎を受け、再び帝都に立還つて、四回の演奏に大成功を収めた」（松居 1925b, 43）。

日本交響楽協会編『日露交歓交響管弦楽演奏会 曲目解説』から、4月26日～5月11日の13公演（東京4、名古屋2、大阪3、京都2、神戸2）が当初から決まっていたと分かる。山田が著した記事「日露交歓交響楽祭に際して」（読売 1925/4/23）に「東京を振出しに全国十一ヶ所、二十三日の演奏をする」とあるが、その予定は変更し⁴⁶⁾、5月13日以降は東京、大阪、京都、岡山、神戸で公演を重ねており⁴⁷⁾、計23公演の情報を確認できた【表1】。

【表1】日露交歓交響管弦楽演奏会の公演と一行の足取り

・新聞の記事と広告、公演プログラム（プ）、公演パンフレット（パ）を主な典拠とする。
 ・次の文献の情報を加える：松居 1925b; 藤野 1966; 日本近代音楽館 1996。

月日	出来事・公演	典拠
4月2日	山田と松居が東京駅を出発、ハルビンへ向かう	東朝 4/2, 読売 4/18
4月10日	ソ連から招聘した音楽家がハルビンに到着して合流する 山田や松居と招聘音楽家らの顔合わせのパーティー（鉄道会館にて）	HJK 4/11, 松居（1925b, 42）
4月11日	一行がハルビンを発つ	HJK 4/11, 松居（1925b, 42）
4月13日	「後藤子爵歓迎会」（大連市主催：ヤマトホテル）にて演奏	満日 4/14, 広告（満日 4/11, 12）
4月14日	大連で演奏会（大連市立高等女学校講堂）主催：双葉幼稚園 後援：松竹合名会社、日本交響音楽協会、満鉄社会課、満州日日新聞社 特等券5円、普通券3円、学生券1円50銭	満日 4/11, 15, 広告（満日 4/7夕, 10, 10夕, 11, 13, 13夕, 14, 14夕）

42) 東京放送局は1925年3月1日から試験放送、22日から仮放送を開始（洋楽放送70年史プロジェクト1997, 6）。

43) グリゴリー・ベッケル Григорий Пеккер (1905～1983) 1924年ベテルブルグ音楽院卒業。25～26年に日本と中国を訪れた後、ライプツィヒ音楽院で研鑽を積む。西欧での演奏活動の後、モスクワ音楽院（1934～38）、キエフ音楽院（1938～57）、ノヴォシビルスク音楽院（1957～）で教鞭をとる（Доброхотов 1978, 226）。

44) 「今日の放送」（都 1925/4/24）掲載の曲目は、ベートーヴェンの弦楽四重奏曲第3番（終楽章）と変奏曲、ボロディーンの弦楽四重奏曲第2番（第3楽章 夜想曲）、ベッケルのチェロ独奏（伴奏：近衛秀麿）でグラズノフ〈スペインのセレナーデ〉op.20-2等。四重奏団が放送局で演奏する写真が『歌舞伎』誌に掲載されている（吉田 1925, 70）。

45) 「ラヂオの夕に興を添ふ」（都 1925/4/25）に写真入りで様子が伝えられている。

46) 大阪公演（5/5, 6, 7）の広告（大朝 1925/5/4夕）に、次の予定が付記されている：京都（8・9日）、神戸（10・11日）、岡山（12日）、広島（13日）、博多（15・16日）、熊本（17日）、長崎（19日）、門司（21・22日）。

47) 大阪の「惜別謝恩大演奏会」では「前回の七十人のオーケストラに比べて今回は露人三十五人に邦人十五人を加へたばかりであつたが、却つてまとまつた感じがあつた」と評されている（大毎 1925/5/19「日露交響楽惜別演奏会」）。

4月15日	一行が「あふりか丸」で大連を出港		満日 4/17
4月17日	松居が帰京		読売 4/18
4月18日	一行が大坂商船「あふりか丸」で神戸入港		大毎 4/19
4月20日	一行が列車で東京駅着		時事 4/21, 国民 4/21, 中央 4/21, 報知 4/21, 都 4/21, 読売 4/21
4月23日	公開練習（築地：同志会館）		時事 4/24, 国民 4/24, 中央 4/24, 報知 4/24, 25, 都 4/24, 読売 4/24, 26
4月24日	東京放送局 JOAK ラジオ出演、「ラヂオの夕」（日比谷音楽堂）		中央 4/22 夕, 報知 4/24, 都 4/24, 25
4月26日	東京公演（歌舞伎座）1日目	座席 8 円, 1 等 7 円, 2 等 5 円, 3 等 3 円, 4 等 1 円 50 銭, 5 等 1 円	プ, 広告多数 (国民, 時事, 東朝, 報知, 萬, 読売)
4月27日	東京公演（歌舞伎座）2日目		
4月28日	東京公演（歌舞伎座）3日目		
4月29日	東京公演（歌舞伎座）4日目		
5月1日	静岡公演（歌舞伎座）後援：静岡新報社・静岡民友新聞社 1 等 3 円 50 銭, 2 等 2 円 80 銭, 3 等 1 円 50 銭, 4 等 1 円		静民 4/26, 27, 28, 29, 広告（静民 4/28, 5/1）
5月2日	名古屋公演（御園座）1日目	特等 3 円 50 銭, 1 等 2 円 80 銭, 2 等 2 円, 3 等 1 円 50 銭, 4 等 1 円	プ, 広告（名古屋 5/1, 2, 3, 新愛 5/1, 2, 3） 藤野（1966, 192）
5月3日	名古屋公演（御園座）2日目		
5月4日	大阪毎日新聞本社、大阪朝日新聞本社を訪問後、松竹座入り		大毎 5/4 夕, 大朝 5/4 夕
5月5日	大阪公演（松竹座）1日目	特等 7 円, 1 等 5 円, 2 等 3 円, 3 等 1 円	パ, プ, 大毎 5/4 夕, 6, 大朝 5/6, 広告（大朝 5/4 夕, 5 夕, 6 夕, 7 夕, 大毎 4/30 夕, 5/4 夕）
5月6日	大阪公演（松竹座）2日目		
5月7日	大阪公演（松竹座）3日目		
5月8日	京都公演（松竹座）1日目	特等 6 円, 1 等 4 円, 2 等 2 円 50 銭, 3 等 1 円	プ, 大朝京 5/6, 京日 5/8 夕, 広告（大朝京 5/3, 8）
5月9日	京都公演（松竹座）2日目		
5月10日	神戸公演（松竹劇場）1日目	特等 7 円, 1 等 5 円, 2 等 3 円, 3 等 1 円	プ, 神戸 5/10
5月11日	神戸公演（松竹劇場）2日目		
〃 午前	「大婚廿五年 奉祝行事」（大倉山グラウンド）*1 主催：神戸新聞社		神戸 5/12, 広告（神戸 5/7, 8, 11）
5月13日	東京 告別公演（青山会館）1日目	3 円, 2 円, 1 円	プ, 中央 5/12, 15, 読売 5/14, 広告（読売 5/13）
5月14日	東京 告別公演（青山会館）2日目		
5月15日	東京 告別公演（日比谷音楽堂）雨天延期のため中止		プ, 中央 5/15, 読売 5/17, 広告（読売 5/15）
5月16日	東京 告別公演（日比谷音楽堂）1日目「独逸の夕」	1 円均一	
5月17日	東京 告別公演（日比谷音楽堂）2日目「露西亞の夕」		
5月18日*2	大阪「惜別謝恩大演奏会」（松竹座）1日目	特等 5 円, 1 等 3 円, 2 等 2 円, 3 等 1 円	プ, 大毎 5/19, 広告（大朝 5/14 夕, 17, 大毎 5/14 夕, 17）
5月19日*2	大阪「惜別謝恩大演奏会」（松竹座）2日目		
5月20日	京都「惜別謝恩大演奏会」（松竹座） 特等 5 円, 1 等 3 円, 2 等 2 円, 3 等 1 円		広告（大朝京 5/17, 20）
5月21日	岡山公演（岡山劇場）	1 等 3 円, 2 等 2 円, 3 等 1 円	山陽 5/8, 11, 18 夕, 21 夕, 大朝岡 5/8, 12, 20
5月23日	SAYONARA-Concert of the Russo-Japanese Symphony Orchestra 神戸：オリエンタル・ホテル A クラス 5 円, B クラス 3 円		プ
5月24日	神戸より出港		日本近代音楽館（1996, 11）

*1 神戸新聞社主催の天皇皇后両陛下「大婚廿五年」奉祝行事。神戸市内女学校生徒 5 千人、小学校代表生徒 1 万 5 千人が、山田耕筰指揮、「日露交響大管弦楽団」伴奏で「国歌奉唱」と「旗行列行進」（「全市日抜の道筋を行進」）を行った（神戸 1925/5/11, 5/12）。

*2 プログラムの日付は 5 月 19・20 日だが、いずれの新聞記事や広告でも 18・19 日であり、20 日には京都公演があるため、プログラムの誤植と判断した。

3-2. 演奏曲目

近衛によれば、ハルビンに先発した役員から吉報を受け、直ぐに双方のレパートリーから4日間のプログラムが編まれた⁴⁸⁾。優れたロシア音楽の伝統の中で育った音楽家を迎えるため、半分近くをロシア音楽に捧げたことが、この企てを一層有意義にしたという(近衛 1925, 11-12)。先述の『日露交歓交響管弦楽演奏会 曲目解説』では歌舞伎座4公演の曲目(山田「音詩二曲」を除く)のほか、山田《明治頌歌》とモーツァルトの交響曲第40番が扱われ、これら19曲目が当初から決定していたと分かる〔表2〕。このうちロシア人作曲家の作品は6つで、約3分の1である。後の巡演でもこれらが中心だが、来日演奏家の中でも「天才チェリスト」として注目を集めたペッケル⁴⁹⁾のソロがある曲など、新たな曲目も加わっている。

近衛はベルリン留学中(1924年1月18日)有料でベルリン・フィルハーモニー管弦楽団を指揮して欧州デビューした際、ドビュッシー《牧神の午後への前奏曲》とカリーニニコフの交響曲第1番を取り上げている。とくに後者は、彼が苦労して総譜を入手した思い入れの強い曲だった(大野 2006, 119-121; 菅野 2017, 27-29)。また近衛は4月29日、チャイコフスキの組曲《くるみ割り人形》op. 71aを指揮している。「始めて来たはがらかな音を出すチェレスタ」(読売 1925/4/6)は、この楽器が前日、日本で初めて近衛のもとに到着したと写真入りで伝えた⁵⁰⁾。

一方の山田は、《牧神の午後への前奏曲》を日本初演している(後藤 2014, 421)⁵¹⁾。また今回の一連の演奏会では、山田の作品が比較的多く取り上げられており、なかでも《明治頌歌》が来日メンバーに好まれたようである⁵²⁾。《「君ヶ代」を主題とせる御大典奉祝前奏曲》⁵³⁾(4月28日)は大正天皇の銀婚式奉祝のための選曲で、約80名が曲中の国歌を合唱した(読売 1925/4/10「日露交歓音楽会」)。そして山田自身は、ベートーヴェンの交響曲第7番、チャイコフスキの交響曲第6番、カリーニニコフの交響曲第1番、リームスキイ=コールサコフ《シェエラザード》、ヴァーグナー《タンホイザー》序曲など「本邦初演の楽曲を網羅した」意義を強調している(山田 1926, 822)。

48) 『報知新聞』は早くも3月30日、あらえびす著「音楽漫談エモレスク 日露交歓演奏」で歌舞伎座4公演の曲目と各曲の指揮者を伝えた。「あらえびす」は作家・野村胡堂のペンネーム(野村胡堂・あらえびす記念館 <http://kodo-araebisu.jp/> 2021年11月26日閲覧)。

49) 「ミユズの寵児 セロの名手」(国民 1925/4/21)、「あざやかなセロのペウケル君」(報知 1925/4/24)、「大作曲家とセロの天才」(報知 1925/4/29)等、諸紙がペッケルの記事を掲載した。

50) 「新楽器 チェレスタ」(都 1925/4/27)は、山田とチェレスタを弾く近衛の写真入りで楽器を紹介する。

51) 後述の1920年末の「帝国劇場 歌劇公演」で《牧神の午後への前奏曲》が演奏された(〔表5〕参照)。

52) 大阪公演の予告(大朝 1925/5/5夕)に「露西亞楽員の希望により第一夜の番組中『牧神の午後』を、山田耕作氏作『明治頌歌』を以て演奏可仕候」とある。

53) 大正天皇の即位式(1915年)に際して、山田が奉祝のために作曲した(前田 1925, 43)。

【表2】日露交歓交響管弦楽演奏会のプログラム

・作曲家、曲名、指揮者の表記は原文に拠る。適宜、今日の一般的な表記を「網かけ」で付記する。
 ・日本交響楽協会編『日露交歓交響管弦楽演奏会 曲目解説』および以下の演奏会のプログラム（日本近代音楽館所蔵、筆者所有^㉔）に基づき、新聞（静国 5/1, 大朝 5/5 夕, 5/14 夕, 大毎 5/14 夕, 大朝京 5/17）の情報を補足。
 4/26, 27, 28, 29（東京：歌舞伎座）5/2, 3（名古屋：御園座）5/5, 6, 7（大阪：松竹座）5/8, 9（京都：松竹座^㉕）5/10, 11（神戸：松竹劇場）5/13, 14（東京：青山会館）5/16, 17（東京：日比谷音楽堂）5/18, 19（大阪：松竹座^㉖）5/23（神戸：オリエンタル・ホテル）

4月26日（日）		指揮者
ベートーヴェン	交響楽第五番	近衛秀麿
カール・ゴールドマーク ゴルトマルク	「サクンタラ」への序楽 序曲《シャクンタラ》	山田耕作
デビツシイ ドビュッシイ	前奏曲「牧神の午後」 《牧神の午後への前奏曲》 【曲目変更】 山田《明治頌歌》*2	山田耕作
リムスキー・コルサコフ	交響楽組曲「シエヘラザード」 交響組曲《シェエラザード》	山田耕作
4月27日（月）*3		
チャイコフスキー	交響楽第六番「悲愴」*4	山田耕作
リスト	交響楽詩「レ・プレリュード」 交響詩《前奏曲》	近衛秀麿
マーラー 近衛秀麿編	第一交響楽第三章 交響曲第1番より第3楽章	近衛秀麿
リヒアル・シトラウス	歌劇「薔薇の騎士」のワルツ	近衛秀麿
(山田耕作)	(音詩二曲 曼陀羅の華 暗い扉)	近衛秀麿
ワーグナー	歌劇「ニュールンベルグの名歌手」序楽	近衛秀麿
4月28日（火）*5		
カリーニコフ カリニンニコフ	交響楽第一番	近衛秀麿
リヒアル・シトラウス	楽劇「サロメ」の音楽*6	山田耕作
山田耕作	「君ケ代」を主題とせる御大典奉祝前奏曲（合唱付）	山田耕作
ワーグナー	浪漫的歌劇「さまよへる和蘭人」の序楽 《さまよえるオランダ人》序曲	山田耕作
4月29日（水）		
ベートーヴェン	交響楽第七番	山田耕作
チャイコフスキー	組曲「胡桃割り」 組曲《くるみ割り人形》op.71a	近衛秀麿
ムーソルグスキー	幻想曲「裸山の夜」 《禿山の一夜》	近衛秀麿
ボロディン	露西亞歌劇「イーゴリ公」の音楽 序楽 韃靼等の行進曲 ポロヴェツィの舞踊 《イーゴリ公》より序曲《ポーロヴェツィ人の行進曲》《ポーロヴェツィ人の踊り》	近衛秀麿
後日の公演で演奏された上記プログラム以外の作品		
スッペ	《詩人と農夫》より*7	(岡山 5/21)
ビゼー	「アルルの女」の第二組曲	近衛秀麿（静岡 5/1, 名古屋 5/2, 東京 5/13, 大阪 5/19）
アール、フォルクマン ロベルト・フォルクマン	小夜曲セロ独奏（絃楽伴奏）独奏家 ベツケル 独奏チェロと弦楽オーケストラのための《セレナーデ》 (番号不詳) 独奏：ベツケル *8	山田耕作（東京 5/16, 大阪 5/18）
ボロディン	歌劇《イーゴリ公》よりアリア バリトン：アレクサンドロフ *9	近衛秀麿（神戸 5/23）
モーツァルト	交響楽第四十番	近衛秀麿（名古屋 5/3, 大阪 5/7, 京都 5/20）
	歌劇「フィガロの結婚」の序曲	近衛秀麿（静岡 5/1, 名古屋 5/2）
ワーグナー	歌劇「タンホイゼ」の序楽 《タンホイザー》より序曲	山田耕作（東京 5/14, 5/16, 大阪 5/18）

山田耕作	交響楽「明治頌歌」	山田耕作（大阪 5/5 ^{*10} ，神戸 5/10）
	「指鬘外道」より	山田耕作（名古屋 5/3，神戸 5/23）
	「野人創造」	山田耕作（名古屋 5/3，神戸 5/23）

- * 1 プログラムは5月19・20日の記載だが、新聞の記事や広告から5月18・19日の誤植と判断した（【表1】*2を参照）。曲目の一部もプログラムと新聞広告（大朝 5/14夕）で異なり、後者に準拠した。
- * 2 近衛（4月20日付の文章）によれば、キエフ音楽院のハープ奏者（ドゥルジーニナのこと）の出国許可証の発行が遅れ、初日に間に合わない可能性があり、初日は《牧神の午後への前奏曲》の代わりに、山田の《明治頌歌》を演奏（近衛 1925, 12）。『歌舞伎』掲載の演奏曲目にも《明治頌歌》とある（吉田 1925, 56）。
- * 3 プログラムの記載に揺らぎがあり、シュトラウス《薔薇の騎士》の代わりに、山田の音詩が記載されているプログラムもある。『歌舞伎』掲載の演奏曲目には《薔薇の騎士》とある（吉田 1925, 56）。
- * 4 『日露交歓交響管弦楽演奏会 曲目解説』では「悲愴」だが、プログラムに「悲壮」の表記も見られる。
- * 5 近衛によれば、第3日の番外にドヴォジャークのチェロ協奏曲（独奏：ベッケル）が加わる（近衛 1925, 12）。
- * 6 《7つのヴェールの踊り》など「特質ある音楽を抜粋して組み合わせ、演奏会用に編曲したもの」（前田 1925, 45）。
- * 7 保田（当時の新聞『中国民報』演芸欄の記者）によれば、チェリストの評判が高かったため「チェロの活躍するところの多いスッペの《詩人と農夫》」が岡山で演奏された（保田 1970, 53）。チェロのソロがある序曲と考えられる。
- * 8 英語のプログラムには、次のように記載。R. Volkmann "Serenade" / For String orchestra with Violoncello Solo / Soloist: G. Pecker
- * 9 英語のプログラムのみ閲覧。次のように記載。Aria from Opera "PRINCE IGOR" (Sung by NICOLAI ALEXANDROFF)
- * 10 本文の註52を参照。

3-3. 演奏会の出演者

【表3】は、演奏会の折に公表された出演者である。来日音楽家35名の姓などは「日露交歓交響管弦楽大演奏会（演奏者姓名並役割明細表）」⁵⁴⁾に拠る。当時の新聞雑誌の記事には来日音楽家の人数の記載にばらつきがあるが、途中から加わった奏者がいたことも一因だろう⁵⁵⁾。この「明細表」に邦人音楽家の氏名はなく、「日本交響楽協会楽員」とだけある。山田によれば「日本側楽人は私達日本交響楽協会の楽員三十六名で、何れも今日まで民間に在つて鋭意技能を錬磨し続けて来た最も真摯な青年音楽者」である⁵⁶⁾。『歌舞伎』誌の記事「日露交響管弦楽演奏会」に日露双方の出演者の記載があり、邦人の氏名はこれに拠る（吉田 1925, 55-57）⁵⁷⁾。1年前に日本交響楽協会が行った演奏会（京都公演）の出演者（1-2参照）と照合すると、重複するのは10名である。

来日音楽家に関しては、後も日本と関わる若干名を除き、日本語の情報は演奏会の配布資料や新聞雑誌の記事に限られる⁵⁸⁾。その一方、彼らが日本を発った日の『暮らしのニュース』（1925/5/24）は、中東鉄道交響楽団の演奏会の予告と共に、楽団員の一覧を掲載している【図版2】。【表4】は

54) 演奏会の折に作成・配布された資料（日本近代音楽館所蔵）。「楽団長」等の肩書もこれに拠る。

55) ハープのドゥルジーニナは一行に遅れて来日（時事 1925/4/21「賑かな都入り 赤いお国の管弦楽団三十余名が昨夕」。クラリネットのヴァシーリエフは5月12日に東京着、13・14日の公演に出演（中央 1925/5/14「クラリネットの名手来朝すモスカ音楽学校教授のワ氏」）。

56) 山田耕作「音楽の最高価値は交響楽の管弦楽 日露交歓演奏に際して」（神戸 1925/5/11）

57) 邦人音楽家の出身等は調査されている（洋楽放送70年史プロジェクト 1997, 26; 武石 2006, 369）。

58) 演奏会のパンフレットや雑誌『歌舞伎』（1925年5月）、当時の新聞記事に主要な来日メンバーの略歴が紹介されている。各人に関する情報は検証を要するため、稿を改めて取り上げたい。

59) 松居によれば、ヴァイオリンの名手「フョードルフ君」はモスクワの家を畳んで二人の息子と細君を連れてハルビンで合流した（松居 1925b, 41-42）。フョードロフは訪日後に中東鉄道交響楽団に加わったと考えられる【表3・4】。

これに準拠する一覧で、[表3] との比較から 28 名が来日メンバーと特定される。松居によれば来日演奏家のうち 25 名が、ハルビンで活動する音楽家だった（松居 1925a, 4）。この情報が正確ならば、日露交歓交響管弦楽演奏会の後に、3 名が中東鉄道交響楽団に加わったことになる⁵⁹⁾。

【表3】日露交歓交響管弦楽演奏会の出演者（当時の資料に拠る）

- ・来日音楽家（35名）の姓は「日露交歓交響管弦楽大演奏会（演奏者姓名並役割明細表）（日本近代音楽館所蔵）に拠る。
- ・邦人音楽家（指揮者以外の36名）の氏名は「日露交歓交響管弦楽演奏会」（『歌舞伎』創刊号）の出演者情報に拠る（吉田 1925, 55-57）。
- ・二重線：1924年4月25日の「日本交響楽協会」京都公演の出演者と一致する人物（プログラム 日本近代音楽館所蔵）。
- ・波線：1925年5月24日時点での中東鉄道交響楽団のメンバーと一致する人物（HJ 1925/5/24）。

指揮者	山田耕作 近衛秀麿		
第1 ヴァイオリン	シッフアーブラート（楽団長） <u>ケエーニツヒ</u> （副団長） <u>トラハテンベルク</u> <u>ドゥブローフ</u> <u>リスキン</u> <u>ベトロフスキー</u> <u>クルチーニン</u> リオーフ 前田璣 波多野鏗次郎 加藤嘉一		
第2 ヴァイオリン	<u>アスラマザヤン</u> （主席） <u>レイゼロヴィツチ</u> アルローフ <u>スリーゾフ</u> <u>ロジェストウエンスキー</u> <u>安藤福太郎</u> 田邊千次 舟橋孝昌 小原勝吉 青柳禮吉		
ヴィオラ	<u>フイョドローフ</u> （主席） アルトマン <u>ストウオロフスキー</u> ヴオンドラー 中村鏗次郎 作間毅		
チェロ	<u>ピエツケル</u> （主席） <u>プリホーチコ</u> <u>リスキン</u> <u>松原與輔</u> 寺田日瑛三 北川嘉納 森直英		
コントラバス	<u>ヴィヤノフスキー</u> （主席） クラスノベーツォフ 寺尾誠一 <u>木下乙彌</u> 岸本武夫 林信造 紙恭輔		
フルート	<u>ウエルホフスキー</u> （監督兼任） 宮田清造 <u>岡村雅雄</u>	オーボエ	<u>サルイチエフ</u> 阿部萬次郎
コーラングラー	<u>ソーリン</u>	クラリネット	<u>ワシーリエフ</u> 橘速男
ファゴット	<u>ゲリマン</u> <u>アリピツキー</u> <u>中根不覇雄</u> 国澤新太郎		
ホルン	<u>ラウエンドリエフ</u> <u>ウリヤンチエンコ</u> 吉田民雄 近衛直麿		
トランペット	<u>ゴルバチエンコ</u> 尾崎禮治 陸奥勝夫	トロンボーン	<u>バビノフ</u> <u>上宮勝</u> 原田五郎
ティンパニ	<u>ジェルバコフ</u>	打楽器	<u>仁木他喜雄</u> 大中寅二 大津三郎
ハープ	<u>ドウルジーニナ</u> （キエフ音楽院教授） <u>郡司昌雄</u>	チェレスタ	近藤柏次郎
図書係	アレキサンドロフ		

【図版2】中東鉄道交響楽団のメンバー：『暮らしのニュース』1925年5月24日掲載（HJ 1925/5/24; Ли Яньлин 2010, 394）

Дириж. А. Ю. Слуцкий Состав СИМФОНИЧЕСКОГО ОРКЕСТРА Дириж. Э. Л. Меттер

Скрипки: Н. Шиферблат (1-й концертмейстер) И. Кениг (2-й концертм.) В. Трахтенберг (солист) Т. Асламалдзян, В. Рейдлер, А. Дубров, М. Рыкин, И. Лейзерович, Б. Кручинин, И. Рождественский, Н. Петровский, П. Слизико.

Альты: А. Федоров, Л. Цимблер, И. Ставровский.

Виолончели: К. Пеккер (солист) В. Приходько, С. Рыскин.

Контрабасы: С. Бузновский (Проф. Ленингр. Консерват.) А. Шалаганов.

Флейты: Н. Верховский (солист Марининского театра, проф. Ленингр. консерв.) В. А. Миховский, С. Липперт.

Тубы: В. Сарычев (солист Марининск. театра) Ч. Имилли, А. Солни.

Кларнеты: А. Васильев (солист Марининск. театра) В. Бабинов.

ФАГОТЫ: Г. Гельман, А. Альбицкий.

Валторны: В. Ловендель (солист Мар. сцены) Т. Ильясов, В. Улянче, М. Писревский.

Трубы: А. Горбаченко (солист Марининск. сцены) Г. Ивашков, В. Пашии.

Тромбоны: В. Ранковецкий, К. Попов, И. Бабинов.

ТРУБА: Э. Деринг.

УДАРНЫЕ: И. Желваков, А. Колонин, А. Алексеевский.

【表4】中東鉄道交響楽団のメンバー：『暮らしのニュース』1925年5月24日掲載

(НЖ 1925/5/24; Ли Яньлин 2010, 394)

・波線：日露交歓交響管弦楽演奏会の出演者

指揮者	A. Yu. スルーツキイ A. Ю. Слуцкий / E. L. メッテル Э. Л. Метгер
ヴァイオリン	<u>N. シフェルブラート Н. Шиферблаг</u> (主席コンサートマスター) / <u>I. ケーニヒ И. Кениг</u> (次席コンサートマスター) / <u>V. トラフテンベルグ В. Трахтенберг</u> (ソリスト) / <u>T. アスラマジヤン Т. Асламаджян</u> / <u>V. レイドレル В. Рейдлер</u> / <u>A. ドゥブローフ А. Дубров</u> / <u>M. ルイースキン М. Рыскин</u> / <u>I. レイゼローヴィチ И. Лейзерович</u> / <u>В. クルチーニン В. Кручинин</u> / <u>I. ロジデーストヴェンスキイ И. Рождественский</u> *1 / <u>N. ペトローフスキイ Н. Петровский</u> / <u>P. スリージコフ П. Слизов</u> *2
ヴィオラ	<u>A. フョードロフ А. Федоров</u> / <u>L. ツィーンブレレル Л. Цимблер</u> <u>I. スタヴローフスキイ И. Ставровский</u>
チェロ	<u>K. ベッケル К. Пеккер</u> (ソリスト) / <u>V. プリホーチコ В. Приходько</u> / <u>S. ルイースキン С. Рыскин</u>
コントラバス	<u>S. プヤノーフスキイ С. Буяновский</u> (レニングラード音楽院 教授) <u>A. シャラガーノフ А. Шалаганов</u>
フルート	<u>N. ヴェルホーフスキイ Н. Верховский</u> (マリインスキイ劇場 ソリスト、レニングラード音楽院 教授) <u>V. ア?ホフスキイ В. А?иховский</u> *3 / <u>S. リッペルト С. Липперт</u>
オーボエ	<u>V. サールイチェフ В. Сарычев</u> (マリインスキイ劇場 ソリスト) / <u>Ch. イミーリン Ч. Имилин</u> <u>A. ソーリン А. Солин</u>
クラリネット	<u>A. ヴァシーリエフ А. Васильев</u> (マリインスキイ劇場 ソリスト) / <u>V. バービノフ В. Бабинов</u>
ファゴット	<u>G. ゲーリマン Г. Гельман</u> / <u>A. アリビーツキイ А. Альбицкий</u>
ホルン	<u>V. ロヴェンデーリ В. Ловендель</u> (マリインスキイ劇場 ソリスト) / <u>T. イリヤソフ Т. Ильясов</u> <u>V. ウリヤンチェンコ В. Ульянченко</u> *4 / <u>M. ピサレーフスキイ М. Писаревский</u> *5
トランペット	<u>A. ゴルバチェンコ А. Горбаченко</u> (マリインスキイ劇場 ソリスト) <u>G. イヴァシユコフ Г. Ивашков</u> / <u>V. パーシン В. Пашин</u>
トロンボーン	<u>V. ランコヴェツキイ В. Ранковецкий</u> *6 / <u>K. ポポーフ К. Попов</u> / <u>I. バービノフ И. Бабинов</u>
ハープ	<u>G. ドゥルジーニナ Г. Дружинина</u>
テューバ*7	<u>E. デーリング Э. Деринг</u>
打楽器	<u>I. ジェルヴァコフ И. Желваков</u> / <u>A. コローニン А. Колонин</u> <u>A. アレクセーエフスキイ А. Алексеевский</u>

*1 この姓の日本での慣習的な表記に準ずると「ロジデーストヴェンスキイ」だが、より原語に近い表記にした。

*2 新聞の記載は「スリージコ Слизов」だが、来日の際「スリージコフ」と紹介され、名前の自然さから「スリージコフ Слизов」と判断した。

*3 “?”の文字は消えている。「アニホーフスキイ Аниховский」などの可能性がある (Chashchin 2014, 38)

*4 新聞の記載は「V. ウリヤンチェ В. Ульянче」だが、同交響楽団の演奏会(1920年7月22日)チラシに記載されたメンバーの中に、ホルン奏者「V. ウリヤンチェンコ В. Ульянченко」(刘欣欣 2002, 11; Цзо 2014, 62)がいる。来日の際にも「ウリヤンチェンコ」と紹介され、名前の自然さから後者の可能性が高いと判断した。

*5 新聞の記載では“a”の箇所は文字が消えているが、名前の自然さから判断した。

*6 新聞ではこの記載だが、名前として不自然なため、「レンコヴェツキイ Ренковецкий」などの可能性がある (Chashchin 2014, 606)。

*7 新聞の記載は「トランペット Труба」だが、トランペット奏者は上に記載があるため「テューバ Труба」の誤植と判断した。

4. 山田耕筰とロシア人歌手との交友——日露交歓交響管弦楽演奏会の伏線

4-1. 山田耕筰の歌劇運動とバリトン歌手アレクサーンドロフ

神戸での告別演奏会(5/23)のプログラムには、バリトン歌手“NICOLAI ALEXANDROFF”によるボロディーンのオペラ《イーゴリ公》のアリアがある〔表2〕。歌手の名は、来日メンバーの「図書係アレキサンドロフ」と一致する〔表3〕。

「アレキサンドロフ」の名は、先の松居のハルビン滞在記にも登場する(2-2)。松居によると山田の親友「アレキサンドロフ・チキン」は、モスクワに本邸をもつ豪華な生活の主だったが、革命で全財産を奪われ、今や舞台上に美声を売らねばならない。「露国楽人招待に関して、最初の手引きをして呉れたのは、此の気の毒な歌人であつた」(松居 1925b, 36)。

また『中央新聞』は一行の東京着を報じる記事⁶⁰⁾で、「代表アレクサンドロフ氏」の次の言葉を紹介している。「私は三年前一年半ばかり日本に居りました、今日かうしてしかもこんな使命を帯び再びてお国に来る事が出来たのを非常にうれしく思ひます」⁶¹⁾。

他方、ハルビンの『暮らしのニュース』紙の広告「コンサート＝舞踏会 Концерт-Бал」(1925/1/22)には、演奏者の中に「N. A. アレクサードロフ(ロシア歌劇団の歌手) Н. А. Александров (арт. рус. оперы)」の名があり、別の演奏会の写真記事【図版3】に「オペラ歌手 N. A. アレクサードロフ оперн. артист Н. А. Александров」の姿がある。そして前掲の「日本におけるロシア交響楽」【資料1】には、日本への演奏旅行に向けて交響楽団を編成する際の「特別に委任された原サンとアレクサードロフ氏の協力」が明記されている。

以上から明白なように、ニコライ・アレクサードロフ Николай Александров は当時(1925年)ハルビンでオペラ歌手として活動しており、グリツァーイや原と共に山田の企画に協力し、山田や松居をハルビン側の関係者に引き合わせた。そして自らも一行の「図書係」として来日し、告别公演ではオペラ歌手として持ち曲を披露したのである。

ここで疑問が生じる。アレクサードロフと山田には、これ以前に如何なる接点があったのだろうか。その答えを得るため、山田の

歌劇運動に目を転じよう。山田が回想するように、日本では1919年にロシア大歌劇団⁶²⁾が初めて本格的な歌劇を紹介した後、浅草オペラが人気を博すなど、大衆的な歌劇ブームが起こる。山田は「真実の歌劇らしい歌劇」の上演を目指し、友人(齋藤佳三、土方与志、近衛秀麿)の協力を得て、1920年12月28～30日に「帝国劇場 歌劇公演」を実現する。山田の指揮でヴァーグナー《タンホ

【図版3】「E. E. シリンスカヤの演奏会の出演者(商業会館にて)」
「オペラ歌手 N. A. アレクサードロフ」(後列右)
(НЖ 1925/2/22; Ли Яньлин 2010, 137)



60) 「美人に迎へられ露国管弦団入京 日露交歓交響楽演奏のため ゆふべ卅五名揃つて」(中央 1925/4/21)

61) ほかに「ロシアの楽人たち三十五名着京す」(読売 1925/4/21)は、「アレキサンドロフ・チキン氏」ら13名が、松竹キネマの運動会に参加したと伝える。

62) 森本頼子の論文(2020; 2021)に詳しい。

イザー》(第3幕 第1場と第2場)、そしてドビュッシーのカンタータ《放蕩息子》が一幕の歌劇《帰れる児》として上演され、翌21年1月17、18日には大阪で公演した【表5】⁶³⁾。「芸術的な」演目に加えて演出もあらゆる面(劇や音楽、照明、舞台装置)で成功し、「日本の劇芸術に一新境地を開拓した」と山田は自負する(山田1926, 808 & 813-815)。この公演のプログラムを見ると、両曲目で「ニコライ・アレキサンドロフ」が主要な役を演じている【図版4】⁶⁴⁾。大阪公演の予告記事⁶⁵⁾では、《タンホイザー》でヴォルフラムに扮する「露国人ニコライ・アレキサンドロフ氏」は、「素エカテリンブルグの大地主で、過激派の乱の為に故郷を逃れ出て、馬に鞭打つて四週間西伯利を旅行して来朝したといふ戯曲的な生涯を送つた人」と紹介されている。

つまり革命後に祖国を去ったアレクサンドロフは、1920年末の時点で山田の歌劇公演に出演し、両者は友情を結んだ。しばらく日本に滞在した後、彼はハルビンでオペラ歌手として舞台に立ち、日露交歓交響管弦楽演奏会の計画を知ると、山田とハルビン音楽界の橋渡し役を担い、日本を熟知する世話役として再来日したわけである。

【図版4】「帝国劇場 歌劇公演」

ドビュッシー《帰れる児》(日本楽劇協会所蔵)
アレクサンドロフとヘルミーデス(中央)



【表5】「交響楽及歌劇 公演会」(1921年1月17日、18日：大阪中之島 中央公会堂 後援：大阪毎日新聞)

作曲者、曲名、演奏者の表記はプログラム(日本近代音楽館所蔵)に拠る。曲名の一般的な表記を網かけで付記する。

第一部	ヴァーグナー「タンホイザー」第三幕 第一場 第二場 《タンホイザー》 エリザベート ニーナ・スコロホドフ Nina Skorohodoff ヴォルフラム ニコライ・アレキサンドロフ Nicolai Alexandroff
第二部	バルリオーズ 夕の祈禱を唱ふ巡礼の行進 《夕べの祈禱を歌う巡礼の行列》(《イタリアの Harold》より第2楽章) ドヴォルジヤック 「亜米利加」よりのスインフォニー(十七日) 交響曲第9番「新世界より」 デビュッスイ 牧神の午後の前奏曲(十八日) 《牧神の午後への前奏曲》 サンサーンス 仏蘭西軍隊行進曲 《フランス軍隊行進曲》(《アルジェリア組曲》より)
第三部	デビュッスイ 歌劇《帰れる児》全一幕 《放蕩息子》 父 シメオン ニコライ・アレキサンドロフ / 母 リア ポーリヤ・ヘルミーデス P. Hermides 息子 アザエル 伊藤祐司 / 舞踊 エレナ・パブロヴァ Erène Pavlova
上演総監督並管弦楽指揮 山田耕作 合唱指揮 近衛秀麿 / 舞台監督 土方与志 / 舞台装置並衣装 齋藤佳三 / 舞台照明 和田精	

63) ポスターは『この道』(日本楽劇協会1982: 59) および『山田耕作と美術』に掲載(ポスターとパンフレットは日本近代音楽館所蔵)。『山田耕作と美術』には公演の写真や舞台衣装画なども掲載されている(木村2020, 74-77)。大阪公演の際に「日本楽劇協会第一回公演」と銘打たれた(後藤2014, 282)。

64) 写真の裏面に赤色鉛筆(一部黒ペン)で次の書き込みがある:「帰れる児」/ バリトン アレクサンドロフ / 母 ヘルミーデス / 土方与志 土方。

65) 「森沈荘厳な情景 恋人に救はれるタンホイザー 本社後援大歌劇交響楽公演」(大毎1921/1/15)

4-2. 山田とバス歌手モジューヒンとの交友

ロシア人音楽家らの招聘では、もう一人のロシア人歌手の助力があった。1924年に来日したバス歌手アレクサンドル・モジューヒン Александр Мозжухин (1878～1952) である。山田は「モジューヒンの斡旋によつて、楽手傭用に種々の便宜が得られた」(山田 1926, 821) と言い、近衛も次のように述べている。「去年来朝した声楽家モジウヒンは我々とハルビンと、進んでは露西亜内地との関係を著しく親密にした。我々が彼から新しい感銘を享けた時、此天真爛漫の芸術家も日本から得難い印象を得て帰つた」(近衛 1925, 11)。

山田はモジューヒンの公演をこう振り返る。「震災の翌夏とおほえる。日本はアレクサンダー・モヂューヒンによつて、はじめて本統の低音歌手を知つた。その頃東京に焼け残つた唯一の楽堂報知講堂で、その時聴衆はモヂューヒンの声量のみに驚異の眼を瞠つた。ピアノニツイモの唱法の巧みさに息を奪はれた。そして日本楽壇は、はじめて本統の歌らしい歌を耳にした」(山田 2001, 2: 246⁶⁶⁾。

オレーグ・シローティンが著したモジューヒンの伝記⁶⁷⁾に拠ると、モジューヒンとピアニストの妻クレオ・カリニ Клео Карини / Cleo Carini⁶⁸⁾ は、1924年2～4月に満州(主にハルビン)、5～6月に中国(上海、天津、北京)を巡演した後、7～9月に日本(東京、大阪、神戸)で公演、「ニッポノホン」に録音を残した(Сиротин 2014, 81-83)。『報知新聞』⁶⁹⁾(1924/6/30夕「モジューヒン氏 けさ入京」)によると夫妻は6月30日に東京に着き、レコーディング風景を伝える記事「モジューヒン氏の吹込み」(報知 1924/7/16)⁷⁰⁾には「モジューヒン氏は近く渡米の途につく」とあり、彼らは日本経由で渡米する計画だったと分かる。

シローティンによれば、モジューヒン夫妻は山田耕筰や日本交響楽協会の客となり、モジューヒンは山田と共演、カリニは山田の歌曲を日本語で独唱し、彼女はそれを帰途でもソ連の諸都市で歌つた。モジューヒン夫妻の思い出の品々の中には、彼らの和服姿の写真があり、山田の家で撮影したものだという(Сиротин 2014, 81-83) [図版5]。

一方『報知新聞』(1924/8/14)は、カリニと山田の写真入りで「カリニ女史は日本服で山田耕作氏と『君がため』の練習を始めてゐる」と伝える [図版6]。カリニは祖国でソプラノ歌手として

66) 「霊で歌ひ語る声——シャリヤピンを讃へる」(初出誌紙不詳) シャリヤピン来日公演(1936年)に際する記事。

67) モジューヒン兄弟の伝記(Сиротин 2014)であり、弟イヴァーン(1889～1939)は映画俳優。彼らの故郷ペンザのレールモントフ記念図書館から刊行され、ペンザには彼らの博物館がある。

68) カリニは芸名で、本名はクレオパートラ・モジューヒナ Клеопатра Мозжухина (1888～1974)。

69) 東京公演(報知講堂: 7月2, 5, 6日)は報知新聞社、後述の「涼しき歌の夕」「露国大声楽家モジューヒン氏告別独唱会」は報知新聞社と東京朝日新聞社の主催で、報知新聞に関連記事が多く掲載された。

70) 同記事によるとモジューヒンは7月15日にロシア歌曲を10枚のレコードに吹き込んだ。日本蓄音器商会の『ワシ印レコード総目録 ニッポノホン [大正14年7月発売まで]』(1925)に、モジューヒンの4枚のSPの情報があつた。ロシアではモジューヒンの録音は稀少(Сиротин 2014, 82 f.181)。

【図版5】

モジュールヒンとカリニ（山田宅にて）
（シロギン 2014, 写真集より）



【図版6】

「日本服を着たカリニ女史と山田耕作氏」
（『報知新聞』1924年8月14日）



国立国会図書館所蔵

も舞台経験があり、「涼しき歌の夕」（8月21日：東京 日比谷音楽堂）⁷¹⁾ の第2部で、山田の歌曲集《風に寄せて歌へる春の歌》⁷²⁾ より〈青き臥床をわれ飾る〉〈君がため織る綾錦〉〈たたえよしらべよ歌いつれよ〉、《澄月集》⁷³⁾、《マルーシャの歌》⁷⁴⁾ を作曲者の伴奏で日本語で歌唱した。モジュールヒンは「モジュールヒン氏独唱会」（9月23日：神戸 聚楽館）⁷⁵⁾ と「露国大音楽家モジュールヒン氏告別独唱会」（9月30日：東京 報知講堂）⁷⁶⁾ でロシアやドイツの歌曲と共に、山田の《馬売り》⁷⁷⁾ 《沖のかもめに》⁷⁸⁾ 《子守歌》⁷⁹⁾ を歌っている。

山田は1924年9月8日、松崎実の小説『扉 地獄篇』⁸⁰⁾ の「序詩」による歌曲《扉》を書き、これをモジュールヒンに捧げている。山田による楽譜（セノオ楽譜）⁸¹⁾ の前書きに、上記の作曲情報や「序詩」と共に、次の一文がある。「折柄、露国大音楽家モジュールヒン氏も在京して、何か作曲して貰ひたいとの同氏の希望があつた時でもあり、右の序詩を、特に、最低音の独唱曲に作曲して、之をモジュールヒン氏に捧げたのである」。あらえびす著「音楽漫談ユモレスク モジュールヒン氏の感奮と山田

71) 最初に山田がモジュールヒン夫妻を紹介、第1部と第3部はモジュールヒン独唱、カリニ伴奏。曲目の中心はロシア歌曲（グリーンカ、ダルゴムィーシスキイ、A. ルビンシテーイン、ポロディーン、ムーソルグスキイ、イッポリートフ＝イヴァーノフ、グレチャーニーノフの作）。プログラムは日本近代音楽館所蔵。

72) 三木露風作詞、1920年作曲（全4曲）（遠山音楽財団付属図書館 1984, 55-56）。

73) 寺崎悦子の短歌五首による連作歌曲、1917年作曲（遠山音楽財団付属図書館 1984, 139）。

74) 劇音楽《星の世界へ》（アンドレエフ原作、小山内薫翻訳）の中の曲、1914年作曲（遠山音楽財団付属図書館 1984, 349-350; 後藤 2014, 202-203）。

75) 主催はイリエ同窓会音楽部・ちぐさ会・神戸文化会。プログラムは日本近代音楽館所蔵。

76) プログラムは日本近代音楽館所蔵。

77) 北原白秋作詞、1923年作曲（遠山音楽財団付属図書館 1984, 33-34）。

78) 北海道民謡の山田による編曲、1918年作曲（遠山音楽財団付属図書館 1984, 498-499）。

79) 日本古謡の山田による編曲、1918年作曲（遠山音楽財団付属図書館 1984: 513-514）。

80) 『扉 地獄篇』は1924年に春秋社から出版され、「序詩」の次の頁に「序詩作曲 山田耕作」とある。山田の《扉》（セノオ楽譜）の前書きによれば、松崎から「序詩」作曲の依頼を受けた。

81) 譜面は全6頁、全50小節。1924年10月出版。

耕作氏の感奮」(報知 1924/9/24)によれば、モジューヒンは《扉》を日本で歌うはずだったが、長い曲で難しかったので、山田がドイツ語で書き改め、モジューヒンが祖国に持ち帰ってロシア語に訳して歌うことになったという。

モジューヒンは日本を去る前、彼が代表を務める「室内楽友の会 Кругок друзей камерной музыки」の会員が訪日する際には、日本交響楽協会が渡航費や滞在費を負担することで合意を得たという(Сиротин 2014, 83)。「室内楽友の会」は1922年4月にモジューヒンの主導により組織され、レニングラードでの室内楽演奏会の開催を中心に(1923~1924年には250回の演奏会を開催)1933年3月まで活動した。知名度や経歴を問わず出演の希望が受け入れられ、若きヴラディーミル・ホロヴィッツ(1903~1989)が脚光を浴び、また若手演奏家のデビューの場ともなった(Сиротин 2014, 72; Устюгова 2016, 50-52 & 56)⁸²⁾。

山田は『東京朝日新聞』(1925/1/25)の記事⁸³⁾で、次のように述べている。「先般日本に來た声楽家のモジューヒン氏が現在会長であるレニングラード音楽協会と私の日本交響楽協会との間には既に契約が成立して、其の会を通してロシアからいゝ音楽家を、又日本からもいゝ日本の芸術家を送らうといふ約束がある。[中略] 会員の中には現在作曲家として第一の名声をもつグラーツノフ、同じく批評家のカラニーツエフ、カラテイーギン、レニングラード音楽学校主任リヒテル(これはピアニスト)、此の他にモスコウの方にサフノフスキー等といふ一流の顔が揃つて居る」。山田が言う「レニングラード音楽協会」は、「室内楽友の会」のことだろう。ここで山田が挙げる人名も、この会の創設に関与した人物である⁸⁴⁾。

折しも日露交歓交響管弦楽演奏会の歌舞伎座での公演初日、ハルビンの新聞記事「モジューヒンの消息」(НЖ 1925/4/26)は、モジューヒン夫妻がレニングラードへの帰途、カフカース地方で巡演中であり、成功を収めていると伝えた⁸⁵⁾。彼らは1925年夏にレングラードに戻り、「室内楽友の会」の演奏会に出演しているが、8月に祖国を離れてからはヨーロッパに活動の場を移す(Сиротин 2014, 84-85)。そのためモジューヒンと山田が交わした契約の履行に関しては、さらなる調査が必要であるが、レニングラードの楽壇に豊富な人脈をもち、ハルビンでも名を馳せたモジューヒンとの繋がりが、山田らがラピスを通してレニングラード等から演奏家を招く上で有利に働いたことは間違いないだろう。

82) ピアニストのマリーヤ・ユーディナやヴラディーミル・ソフロニーツキイ、レフ・オポーリン、ドミートリイ・シヨスタコーヴィチ(ピアニストとして)らがデビューした(Устюгова 2016, 52)。

83) 記事名「新条約で楽壇にも春は近づく——待たるゝロシアの新人達」

84) 「室内楽友の会」の創立に関与した人物の中に作曲家 A. グラズノフ、批評家 V. コロミーイツェフ V. Коломийцев と V. カラトウイーギン V. Карагыгин、ピアニスト N. リーヒテル H. Рихтер のほか、クレオ・カリニヤ作曲家 A. ルリエーらがいる(Сиротин 2014, 72; Устюгова 2016, 50)。

85) 帰途では韓国と満州を経由し、シベリアの諸都市でも演奏会を行った(Сиротин 2014, 84)。

結び

本論では日露交歓交響管弦楽演奏会に関する詳細のみならず、演奏会を通して山田らとソ連やハルビンの音楽界との多面的な結びつき（ラビス加入や人脈の広がり）が生じたこと、これに先立つ山田とロシア人音楽家の交友が企画の実現に繋がったことも明らかにした。

この演奏会の開催に寄せた文章で、山田は次の抱負を述べている。「この企てが、一時の感喜としてに留まらず、一日も早く、私どもの愛する祖国に、美しい交響的の響を鳴り出さしめる処の健全なる交響管弦楽団の誕生することを希願する」（山田 1925, 10）。その翌年（1926年1月～6月）日本交響楽協会は、山田と近衛の指揮、ケーニヒ（日露交歓交響管弦楽演奏会の副団長）の客演指揮で定期演奏会を行う。だが協会内の人間関係の纏れから会員40余名が脱退し、同年10月に近衛を中心に新交響楽団（NHK交響楽団の母体）が結成される（NHK交響楽団 1977, 102; 後藤 2014, 293-295）。近衛と共に指揮者を務めたのはケーニヒであり、彼が1929年6月にハルビンへ戻ると、シフェルブラート（日露交歓交響管弦楽演奏会の楽団長）が後任となる（NHK交響楽団 1977, 105-111）。山田が烽火を上げた交響楽運動は、こうして日露交歓交響管弦楽演奏会の同志に引き継がれ、シフェルブラートが最後に指揮した1936年7月⁸⁶⁾まで、ロシア音楽界との深い関わりが続くことになる。これに関しては、稿を改めて考察したい。

■ 新聞 [略記] ■

Новости жизни [HЖ] / 『大阪朝日新聞』[大朝] / 『大阪朝日新聞 岡山版』[大朝岡] / 『大阪朝日新聞 京都滋賀版』[大朝京] / 『大阪毎日新聞』[大毎] / 『京都日日新聞』[京日] / 『神戸新聞』[神戸] / 『国民新聞』[国民] / 『山陽新報』[山陽] / 『時事新報』[時事] / 『新愛知』[新愛] / 『静岡民友新聞』[静岡] / 『中央新聞』[中央] / 『東京朝日新聞』[東朝] / 『名古屋新聞』[名古屋] / 『報知新聞』[報知] / 『満州日日新聞』[満日] / 『都新聞』[都] / 『読売新聞』[読売] / 『萬朝報』[萬]

■ 引用文献 (外国語) ■

※露語の人名のカタカナ表記、露語の書名または論文名の日本語訳、中国語の人名と書名の新字体表記を〔〕内に付記する。

Chashchin, Kirill V. 2014. *Russians in China: Genealogical Index 1926–1946*. New York: South Eastern

86) 第5回新響プロムナードコンサート（1936年7月11日）（NHK交響楽団1977, 演奏記録74）。

- Publishers.
- Shaohua, Diao. 2001. “Краткий обзор истории русской печати в Харбине”, *Revue des Études Slaves*. vol. 73, no. 2/3: 403-445. [「ハルビンにおけるロシアの新聞雑誌の歴史概観」]
- Доброхотов, Б. В. 1978. “Пеккер Григорий Ильич”. *Музыкальная энциклопедия в 6 т.*, т. 4. Келдыш, Ю. В. гл. ред. Москва: Советская энциклопедия: 226. [ドブプロホートフ, В. В. 「ベッケルグリゴリー イリイチ」『音楽百科事典』第4巻]
- Крыловская, Изабелла. 2016. “Хроники деятельности харбинского отделения профессионального союза работников искусств (1925–1929 гг.)”, *Исторические, философские, политические и юридические науки, культурология и искусствоведение. Вопросы теории и практики*. № 11(73) в 2-х ч., ч. 1. Тамбов: Грамота: 72-82. [クリロフスカヤ, イザベッラ 「芸術労働者組合ハルビン支部の活動記録 (1925～1929年)」]
- Ли Яньлин (главный составитель). 2010. *Культурное наследие русской эмиграции в Китае в 100 т.* [электронное издание], т. 9. [李延齡 Li Yanling 『中国におけるロシア人移民の文化遺産 全100巻』第9巻]
- Сиротин, Олег. 2014. *Двойная звезда: Александр и Иван Мозжухины*. Пенза: Управление культуры и архива Пензенской области, ГБУК “Пензенская областная библиотека им. М. Ю. Лермонтова”. [シローティン, オレーグ 『二重星: アレクサンдр・モジューヒンとイヴァーン・モジューヒン』]
- Устюгова, Александра. 2016. “Из истории концертной жизни Петрограда-Ленинграда: Кружок друзей камерной музыки (1922-1933)”, *Музыкальная академия*. 2016 (1): 50-57. [ウスチューゴヴァ, アレクサンドラ 「ペトログラード=レニングラードの演奏活動の歴史から: 室内楽友の会 (1922～1933)」]
- Цзо Чжэньгуань. 2014. *Русские музыканты в Китае*. Санкт-Петербург: Композитор. [左貞観 Zuo Zhenguan 『中国におけるロシア人音楽家たち』]
- 刘欣欣; 刘学清 2002 『哈尔滨 西洋音乐史』 北京: 人民音乐出版社。[劉欣欣; 劉学清 『哈爾濱 西洋音樂史』]

■ 参考文献 (日本語) ■

- 麻田雅文 2012 『中東鉄道経営史——ロシアと「満州」1896–1935』 名古屋: 名古屋大学出版会。
- 井口淳子 2019 『亡命者たちの上海楽壇——租界の音楽とバレエ』 東京: 音楽之友社。
- 岩野裕一 1999 『王道楽土の交響楽——満州 知られざる音楽史』 東京: 音楽之友社。
- 岡野弁 1995 『メッテル先生——朝比奈隆・服部良一の楽父、亡命ウクライナ人指揮者の生涯』 東京: リットーミュージック。

- NHK 交響楽団（編） 1967 『NHK 交響楽団 40 年史 1926-1966』 東京：日本放送出版協会。
- 1977 『NHK 交響楽団 50 年史 1926-1977』 東京：日本放送出版協会。
- 大谷竹次郎 1925 「日露交歓大演奏会を開くに際して」『日露交歓交響管弦楽演奏会 曲目解説』
日本交響楽協会（編）1-2 東京：日本交響楽協会。
- 大野芳 2006 『近衛秀麿——日本のオーケストラをつくった男』 東京：講談社。
- 川島京子 2012 『日本バレエの母——エリアナ・パヴロバ』 東京：早稲田大学出版部。
- 木村理恵子（編） 2020 『山田耕筰と美術』 栃木：栃木県立美術館。
- 後藤暢子 2014 『山田耕筰——作るのではなく生む』 京都：ミネルヴァ書房。
- 近衛秀麿 1925 「交響管弦楽演奏会と曲目のこと」『日露交歓交響管弦楽演奏会 曲目解説』 日本
交響楽協会（編） 11-12 東京：日本交響楽協会。
- 菅野冬樹 2017 『亡命オーケストラの真実』 東京：東京堂出版。
- 武石みどり 2006 「ハタノ・オーケストラの実態と功績」『お茶の水音楽論集』 特別号：363-373。
- 遠山音楽財団付属図書館（編） 1984 『山田耕筰作品資料目録』 東京：遠山音楽財団付属図書館。
- 日本楽劇協会（編） 1982 『この道——山田耕筰伝記』 東京：恵雅堂。
- 日本近代音楽館（編） 1996 『山田耕筰年譜』 東京：日本近代音楽館。
- 日本交響楽協会（編） 1925 『日露交歓交響管弦楽演奏会 曲目解説』 東京：日本交響楽協会。
- 藤野義雄 1966 『御園座七十年史』 名古屋：御園座。
- 前田三男 1925 「曲目解説」『日露交歓交響管弦楽演奏会 曲目解説』 日本交響楽協会（編）3-72
東京：日本交響楽協会。（「曲目解説」には他の部分とは別個にページ数が付されている）
- 松居松翁 1925a 「隣邦の芸術家を迎ふるについて」『日露交歓交響管弦楽演奏会 曲目解説』 日本
交響楽協会（編） 3-7 東京：日本交響楽協会。
- 1925b 「露国楽人を迎へて」『演芸画報』 第 19 年第 6 号（6 月 1 日発行）：36-43。
- 松崎実 1924 『扉 地獄篇』 東京：春秋社。
- 森本頼子 2020 「大正期日本における白系ロシア人のオペラ活動——1919, 21 年の『ロシア大歌
劇団』公演を中心に」『金城学院大学論集』 人文科学編 第 16 巻第 2 号：154-166。
- 2021 「白系ロシア人によるオペラ文化の伝播——一九一九、二一年来日の『ロシア大歌劇
団』の足跡をたどって」『オペラ／音楽劇研究の現在——創造と伝播のダイナミズム』 佐藤英・
大西由紀・岡本佳子（編）89-112 東京：水声社。
- 保田太郎 1970 『岡山音楽夜話——演芸記者の回想風自伝』 岡山：日本文教出版。
- 山田耕作 1925 「日露交歓交響管弦楽演奏会を開くにあたって」『日露交歓交響管弦楽演奏会 曲
目解説』 日本交響楽協会（編）8-10 東京：日本交響楽協会。
- 1926 「音楽篇 洋楽」『新日本史』 第 3 巻 武井文夫（編）781-829 東京：萬朝報社。
- 山田耕作 2001 『山田耕作著作全集』 全 3 巻 後藤暢子・團伊玖磨・遠山一行（編）東京：岩波書店。
- 洋楽放送 70 年史プロジェクト（編） 1997 『洋楽放送 70 年史 1925-1995』 東京：ミュージアム図書。

吉田暎二（編） 1925 『歌舞伎』 創刊号（5月） 東京：歌舞伎発行所。

〔楽譜〕

山田耕作 1924 『扉』 松崎実（詩） 東京：セノオ音楽出版社。（日本近代音楽館所蔵）

本研究は科研費（21K00817）の助成を受けたものである。論文中の表は全て執筆者が作成した。

本稿の執筆に際し、貴重な資料を提供して下さった山田浩子氏（日本楽劇協会）、日本近代音楽館、国立国会図書館、岡山県立図書館郷土資料班（隈元恒氏）にお礼を申し上げます。

**Russo-Japanese Symphonic Orchestra Concert:
Links between Russian music and Kôşçak Yamada's Promotion Activity of Orchestral Music**

Yasuko NOHARA

This study focuses on the Russo-Japan Symphonic Orchestra Concert (April–May 1925), which was planned and led by Kôşçak Yamada (1886–1965). Yamada invited musicians, who had worked in Russia, from Harbin and the Soviet Union. He organized a mixed orchestra of these foreign musicians and the members of the Japan Symphony Association led by Yamada himself. Their tour for about a month began in Tokyo at the theater Kabuki-za. The concert was realized through a partnership between Shochiku Gomei-Sha (present-day Shochiku Co.), the company that managed Kabuki-za, and the Japan Symphony Association. It was held as an event to celebrate the reopening of Kabuki-za after the Great Kanto Earthquake and the restoring relations between Japan and the then Soviet Union. It can be regarded as the starting point of a full-scale promotion activity for orchestral music in Japan, and its significance in introducing Western music to Japan is widely recognized.

Previous studies on the concert examined Japanese materials such as programs, Yamada's letters, and articles on newspapers and periodicals of the time. However, the information regarding foreign participants of the concert is insufficient. Moreover, most of the surnames of the participants were known only in katakana notation at the time. On the contrary, *News of Life* (*Новости жизни*), a Russian newspaper published in Harbin, and recent studies (mainly Russian literature) on Russian musicians who lived in Harbin after the Russian Revolution provide valuable information about this concert and its foreign participants. Therefore, in this study, we provide new information about the concert and its foreign participants by examining the materials in Japanese from the time and collating them with the materials available in Russian. We also clarify the multifaceted connection between Yamada and Russian music.

In Section 1, we trace the process from the planning of the concert to its realization. In Section 2, we focus on the music activity in Harbin and Matsui Shouou, the dramaturge of Shochiku Gomei-Sha, and Yamada's stay in Harbin. Many of the foreign participants of the concert were musicians who left post-revolutionary Russia and joined the Symphony Orchestra of the Chinese Eastern Railway in Harbin. The Harbin branch of the RABIS (Trade Union of Art Workers in the Soviet Union) played a central role in sending Russian musicians to Japan. In Section 3, we focus on the concert and provide detailed information about the tour schedule, programs, and performers. We also obtain new information on foreign participants, especially from the articles published in *the News of Life*. In Section 4, we explore the exchange between Yamada and two Russian vocalists, Nikolai Alexandrov and Alexander Mosjouhin, who visited Japan before the concert and

helped him invite Russian musicians to Japan for the concert. Nikolai Alexandrov, who visited Japan for the Russo-Japanese Symphonic Orchestra Concert, appeared on the stage of the operas conducted by Yamada at the end of 1920. Alexander Mosjouhin held concerts in Japan in 1924. During this time, Yamada became acquainted with him and dedicated his song *Tobira (Door)* to him.

日露交歓交響管弦楽演奏会

——山田耕筰の交響楽運動とロシア音楽界の繋がりを探る——

野原泰子

本論の研究対象は、山田耕筰（1886～1965）が企画・主導した日露交歓交響管弦楽演奏会（1925年4～5月）である。山田はロシアでの演奏経験をもつ音楽家（おもにロシア人）をハルビンヤソ連から招き、彼自身が率いる日本交響楽協会の音楽家と混成オーケストラを形成し、東京の歌舞伎座を皮切りに約1ヶ月にわたる巡演を行った。歌舞伎座を運営する松竹合名社と日本交響楽協会の提携により実現した催しで、関東大震災後の歌舞伎座の再開、および日ソの国交回復を祝賀する行事だった。この演奏会は日本の本格的な交響楽運動の嚆矢となり、日本の洋楽受容におけるその意義は広く認められている。

この演奏会に関する先行研究では、当時の日本語の資料（プログラム、新聞や雑誌の記事、山田の書簡など）が調査されている。しかしそれらの資料では、来日演奏家に関する情報は限られており、彼らの大部分の姓すら、当時のカタカナ表記で知られるだけだった。その一方、当時のハルビンの露語新聞『暮らしのニュース』、そしてロシア革命後にハルビンで活動したロシア人音楽家に関する近年の研究（露語文献）には、この演奏会や来日演奏家に関する貴重な情報が見出される。こうした現状を踏まえ、本論では当時の日本側の資料を精査し、上述のロシア語の資料と照合することで、この演奏会や来日演奏家に関する新たな情報を提供すると共に、山田とロシア音楽界との多面的な繋がりに光を当てる。

第1章では、演奏会の企画から開催に至るまでの経緯を辿る。第2章では当時のハルビン音楽界の状況や、山田と松居松翁のハルビン滞在に着目する。日露交歓交響管弦楽演奏会に参加した来日音楽家の大部分は、ロシア革命後に祖国を離れてハルビンへ移住し、当地の中東鉄道所属の交響楽団で活動するロシア人音楽家である。ハルビンヤソ連から音楽家を招聘する上では、ラビス（ソ連の芸術家労働組合）のハルビン支部が中心的な役割を果たした。第3章では演奏会自体に焦点を当て、巡演のスケジュール、演奏曲目、出演者に関する詳細な情報を提供する。なかでも来日音楽家に関する情報は、上述の露語資料に基づく新たなものである。第4章では、この演奏会に先立って来日した二人のロシア人声楽家と山田の接点に着目する。バリトン歌手のニコライ・アレクサンドロフは日露交歓交響管弦楽演奏会では図書係として来日しており、1920年末に山田が指揮する歌劇公演に出演している。バス歌手のアレクサンドル・モジュールヒンは、1924年夏に来日公演している。その際に山田はモジュールヒン夫妻と親交を結び、モジュールヒンに自作の歌曲《扉》を献呈している。彼らもロシア人音楽家を日本に招聘する上で、山田に助力した事実が明らかになる。